



▲▼ 三須の鮎やな 昭和44(1969)年11月 個人蔵



▲落テ簀(おてす):簀の子上に落ちた鮎を捕獲します。簀の子とは、竹や板などを少しずつ間隔をあけて横並びにして板状に打ち付けたものです。

延岡市の秋の風物詩である鮎やな。江戸時代から三百年以上にわたって続いています。毎年十月下旬頃から十二月第一日曜日まで、大瀬大橋下流に鮎やなが架設されます。市街地に鮎やなが架設されるのは全国的に珍しく、また、一〇〇メートルを超える川幅への架設は国内最大級の規模です。平成十三(二〇〇二)年には、川原で鮎を焼く風景が環境省選定「日本かおり風景百選」に認定されています。

表紙の写真二枚は、昭和四十四(一九六九)年の三須の鮎やなです。今から五十年ほど前までは、市内複数箇所に鮎やなが架設されていました。三須の鮎やなは、本号五頁に掲載している、絵図「大延岡の展望」(昭和七(一九三二)年発行)にも描かれています。

今年、宮崎県は明治十六（一八八三）年に再設置されてから一四〇年の節目を迎えました。そこで、今号では、明治維新から明治十六年に宮崎県が再設置されるまでの歴史を紹介します。

明治維新と初期宮崎県の誕生

慶応三（一八六七）年十二月、王政復古の大号令が発出され天皇を中心とする新政府が樹立し、次々と政治の刷新が進められました。明治二（一八六九）年六月には全国で版籍奉還が実施され、すべての版（領地）及び籍（領民）が新政府の支配下に置かれ、旧大名は旧領地の知藩事に任命され、そのまま藩政を担いました。その後、明治四（一八七二）年七月には廃藩置県が断行され、藩は県となり、知藩事は罷免されて東京在任を命じられ、代わって新政府より府知事・県令が任命・派遣されました。

廃藩置県に伴い、日向国内には、それぞれ旧藩を所管とする、延岡・高鍋・佐土原・飫肥の各県と鹿児島・人吉両県の一部が誕生しました。同年中に行政区画がさらに整備され、十一月には大淀川以北が美々津県、以南が大隅半島地域とともに都城県となりました。この結果、延岡県はわずか四ヶ月で廃止されました。

その後も全国的に行政区画の再編が行われ、明治六（一八七三）年一月、美々津県と都城県（大隅半島部を除く）とを合併した最初の宮崎県が誕生しまし

た。県庁は、宮崎郡上別府村（現在の県庁敷地）に建設されました。

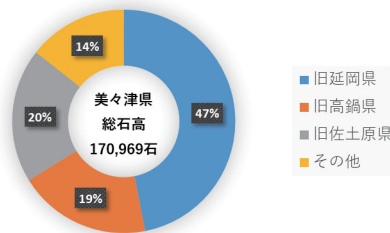
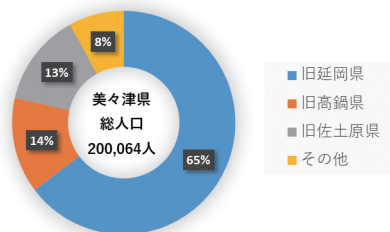
しかし、明治九（一八七六）年に全国的な県の統廃合が大規模に実施され、同年八月に初期宮崎県は廃止され鹿児島県宮崎支庁となりました。これに伴い、旧県庁は鹿児島県宮崎支庁となりました。そして、この翌年に西南戦争が勃発します。

美々津県のナゾ

旧延岡県などを統合して誕生した美々津県ですが、右のグラフにあるように、人口や石高という点では、旧延岡県が主要地域でした。

しかし、美々津県の県庁は最初美々津（旧高鍋県）に置かれ、後に富高（旧幕府領）に移転し、ついには旧延岡県に設置されることはありませんでした。

なぜ「美々津県」と命名されたのか、そしてなぜ「美々津」に県庁が置かれたのか。『日向市史』でも示されたこの謎は依然不明なまです。



実在した延岡県

廃藩置県により、旧延岡藩がそのまま延岡県に置き換えられた結果、わずか4ヶ月とはいえ、延岡県が確かに存在していました。

美々津県庁文書には、統合した各県の旧県庁を美々津県の出張所とし、標札を変更するよう出した布達が残っており、延岡県の県庁の存在を史料的に確認することができます。しかし、県庁が設置された詳細な場所についてはわかっていません。



▲鹿児島紀聞 吉次越激戦 篠原討死之談 画：山崎年信 大内昭雄氏所蔵
吉次越：現熊本県玉名郡玉東町
西南戦争の錦絵です。田原坂の戦いと並ぶ激戦地として知られています。

分県運動

明治初期、新政府は廃藩置県や廃刀令、秩禄処分など様々な政治改革を推し進めました。しかし、新政府樹立に貢献しながらもその改革に不満を抱く一部の不平士族が、各地で蜂起しました。西南戦争は、その最後にして最大規模の反乱です。

明治十(一八七七)年二月に西郷隆盛が拳兵、西郷率いる薩軍は熊本鎮台の拠点熊本城を包囲したものの政府軍に破れ、人吉、さらに宮崎へと後退し、以降、当時鹿児島県だった旧宮崎県域が戦場となりました。このため、旧宮崎県域は、家屋焼失や田畑荒廃、また、西郷札の乱発による多大な経済的損失を被りました。

西南戦争からの復興がままならない中で、明治十三(一八八〇)年頃から旧宮崎県出身の有志が、鹿児島県からの分離・独立を目指すようになります。この頃、全国的に自由民権運動や分県運動が展開されており、こうした流れに刺激を受けての活動でした。

分県運動の中心的人物は、宮崎郡木原村(現宮崎市清武町)生まれの川越進です。その川越に劣らず、活発に活動を行った人物が、延岡出身の藤田哲蔵です。藤田は、安政三(一八五六)年に臼杵郡恒富村に生まれ、明治十三(一八八〇)年に鹿児島県会議員になっています。

川越と藤田ら有志一同は宮崎県再設置に向け、政府や鹿児島県に働きかけますが、渡辺千秋鹿児島

令の反対もあり順調には進みませんでした。そのため、川越と藤田は上京し、参議伊藤博文や内務卿山田顕義ら政府高官などとの面会を重ね、宮崎県の分県を粘り強く訴え続けました。その後、鹿児島県会を通して分県を願い出るようにとの山田内務卿の発言を受け、明治十五(一八八二)年三月、川越たちは鹿児島県会で分県の審議を開始しますが、協議は難航します。

明治十六(一八八三)年二月に川越が県会議長に選出されたこともあり、翌三月に分県建議案がようやく可決され内務省に提出されました。そして、同年五月九日、富山県・佐賀県とともに宮崎県(分県に強く反対した志布志・大崎・松山の三郷を除く)の再設置が布告されたのでした。

新しく設置された宮崎県で、藤田は県会議員となり、明治二十二(一八八九)年から二十三年四月まで県会副議長を務めています。

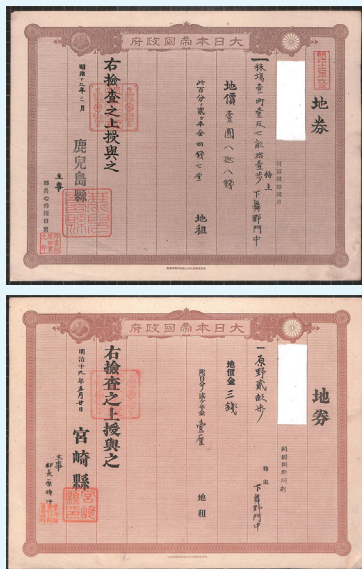
以上のように、延岡地方の行政区域は、明治四(一八七二)年の廃藩置県以降、延岡県、美々津県、宮崎県、鹿児島県と変遷し、明治十六(一八八三)年の宮崎県再設置を以って現在に至ります。当時の延岡地方の人々にとって、この変遷はどのように受け止められたのでしょうか。関係資料をお持ちでしたら、ぜひご連絡ください。

延岡は大分県になりえた？

明治15(1882)年3月に鹿児島県会で開始された分県の審議の中では、臼杵郡(延岡市域を含む地域)のみを大分県に編入する案も協議されましたが却下されています。最終的に宮崎県へ編入され、現在に至ります。

大分県とのつながりは、日豊線全通とともに発足した南延岡機関区が大分運輸事務所の管轄となったことからもうかがえます。

▲地券(舞野公民館所蔵)
舞野地区が所有した地券です。上は、鹿児島県併合期の明治十五(一八八二)年発行のもので、鹿児島県の公印が押印されています。下は、分県後の明治十九(一八八六)年発行のもので、宮崎県の公印が押印されています。



文献

- ・「宮崎県史 史料編 近・現代」(宮崎県、一九九二年)
- ・「舞野郡 分県運動詳記」(藤田哲蔵氏日記) (宮崎県総合博物館研究紀要 第23輯、宮崎県総合博物館、二〇二二年)
- ・「都城市史 通史編 近現代」(都城市、二〇〇六年)
- ・「日向市史 通史編」(日向市、二〇〇九年)

令和五(二〇二三)年二月十二日、延岡市は、昭和八(一九三三)年の市制施行から九十年の節目を迎えました。ここでは、町村制施行(明治二十二(一八八九)年)から現在に至るまでの延岡地域の歴史について紹介します。

明治22年町村制施行

明治二十二(一八八九)年の町村制施行により、現在の延岡市域に、延岡町(北町・中町・南町・柳沢町・元町・博労町・紺屋町)、岡富村、恒富村、東海村、伊形村、南方村、南浦村、北方村、北浦村、北川村の一町九村が成立しました。

町村制とは、町・村それぞれ地元の名士を首長とし(原則無給)、また、町村会に等級選挙を導入し有産者を議員に選出することで、地方社会の政治的安定を目指した制度です。この町村制導入に先立ち、首長が安定して行政を執行できる範囲を決定すべく、町村合併が行われたのです。

こうして成立した一町九村では、各々の地理的特性を活かした地域振興が図られました。恒富村では日吉小次郎らによつて耕地整理事業が進められ、農業に重点が置かれました。伊形村では、赤水の日高亀市とその長男栄三郎が日高式大敷網を開発して鱸の豊漁に成功し、村の発展にも貢献しました。また、南方村では、南方村長兼県会議員であった甲斐奎太

郎が、岩熊井堰や出北・吉野用水路の改修及び野田・大貫水路のサイフォン工事に取り組み、南方村はもとより恒富・岡富・伊形各村の一部地区でも灌漑用水不足が解消され、農業の振興が図られました。

大正12年日豊本線が全線開通

市制施行以前の延岡地域は、時代の波とともに大きく変わっていきました。明治時代以降、全国で鉄道敷設が進められ、大正時代に入ると、宮崎―佐伯間の日豊本線が、延岡を基点として延岡以南の日豊南線と延岡以北の日豊北線とに分けて敷設工事が開始され、大正十一(一九二二)年五月一日に日豊南線が開通しました。一方の日豊北線は宗太郎峠で敷設工事が難航し、大正十二(一九二三)年十二月十五日にようやく開通、ここに日豊本線が全線開通しました。

また、延岡地方の豊かな水源は水力発電に活かされ、地域の発展に貢献しました。明治時代後半、当時内藤家が経営していた日平銅山の鉱業用電力として、綱の瀬川に菅原(すげばる)・片内発電所が設置されました。明治四十三(一九一〇)年、内藤政拳はその余剰電力を一般家庭に供給するために延岡電気所を開業しました。さらに、大正九(一九二〇)年になると、野口遵が五ヶ瀬川電力を設立しました。翌年、カザレー式アンモニア合成法の特許を購入し

た野口は新工場建設を計画、電力及び鉄道網の整備が進む延岡地方に着目し、大正十一(一九二二)年三月、恒富村に日本窒素肥料延岡工場を建設することを決定しました。同年八月には建設が始まり、翌年十月に新工場が完成し操業を開始しました。

延岡町と岡富村、恒富村が合併

こうした開発工事の進展に伴い、延岡町・岡富村・恒富村の合併が協議されるようになり、昭和五(一九三〇)年四月に一町二村が合併して延岡町となりました。合併後の延岡町は、工業都市として発展していきます。そして、昭和八(一九三三)年一月の内務省告示を受け、二月十一日に延岡市が誕生しました。県内で宮崎市・都城市(ともに大正十三(一九二四)年四月一日)に次いで三番目の市制施行となりました。



延岡市制の変遷

明治22(1889)年	町村制施行により延岡町(北町・中町・南町・柳沢町・元町・博労町・紺屋町)、岡富村、恒富村、東海村、伊形村、南方村、南浦村、北方村、北浦村、北川村が誕生
昭和5(1930)年	延岡町・岡富村・恒富村が合併し、新しい延岡町が誕生
昭和8(1933)年	延岡市制施行
昭和11(1936)年	延岡市と東海村・伊形村が合併
昭和30(1955)年	延岡市と南方村・南浦村が合併
平成18(2006)年	延岡市と北方町・北浦町が合併
平成19(2007)年	延岡市と北川町が合併し現在に至る
令和5(2023)年	延岡市制施行90年

明治22年(1889)当時の行政区分地図



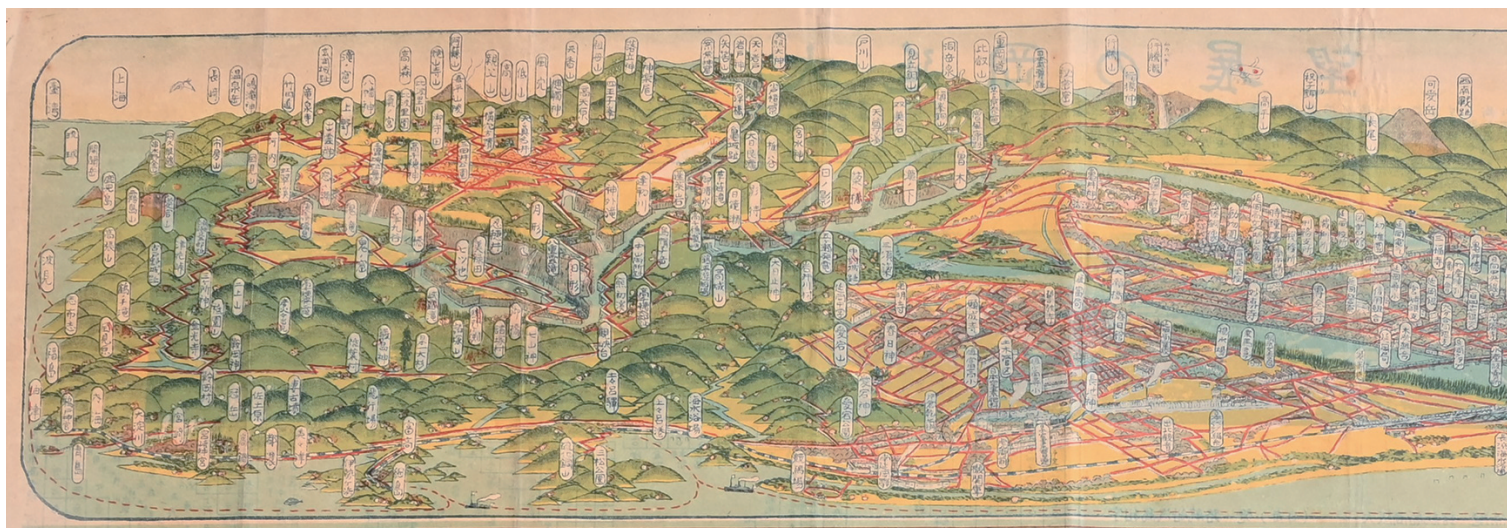
※この図は、『延岡城・内藤記念博物館 展示案内 ミュージウムガイドブック』(2022年)より転載

その後、延岡市は、昭和十一(一九三六)年には東海村・伊形村と、昭和三十(一九五五)年に南方村・南浦村と合併しました。

一方、北方村は昭和四十五(一九七〇)年十一月三日に、北浦村及び北川村は昭和四十七(一九七二)年十一月一日にそれぞれ町制が施行され、北方町・北浦町・北川町が誕生しました。その後、平成の大合併に伴い、延岡市は、平成十八(二〇〇六)年に北方町・北浦町と、平成十九年に北川町と合併し、現在に至って

います。

合併により九州で二番目に広い面積を有するに至った延岡市は、東九州随一の工業集積地としての位置付けに加え、農林水産業など多彩な産業が盛んであり、川や海、山に囲まれた風光明媚で自然豊かな都市となっております。また城下町として栄えた本市は歴史と文化に育まれた都市でもあり、産業と自然や歴史・文化が調和した都市となっております。



▲大延岡の展望 昭和7(1932)年 甲斐盛豊氏所蔵

昭和7(1932)年延岡町時代の絵図です。市街中心部から大瀬川対岸に向けて「三須橋」が架設されている様子が描かれています。

部会通信

中世部会



▲ 春日神社での史料調査

五月に部会を開催し、併せて春日神社及び愛宕神社が所蔵する棟札や古典籍の調査及び史料撮影を行いました。棟札とは、家屋や寺社の建築や修復に際して、建物名や願主、上棟年月日等を記して、棟木に打ち付けた板のことです。

また、『宮崎県史』や他自治体史などから延岡の中世に関する史料の所在確認を進めており、今後確認のできた史料を本格的に調査していく予定です。

古代部会



▲ 旧北川町字図の資料調査

昨年度までの延岡市内における古代官道ルートの検証作業及び現地調査を続け、大分県側のルートについて大分県の調査成果を加えて研究を進めています。九月には、明治時代の北川村の字図から、古代官道ルートを復元するための資料調査を行いました。また、西都市内の神社が所蔵する史料の調査や、「日向国風土記」逸文の写本について研究も行っています。

考古部会



▲ 令和五年度第一回目考古部会打合せ

今年五月に部会を開催し、令和四年度の活動報告や今年度の予定について協議しました。また、稲葉崎町の県指定史跡菅原神社古墳の測量をはじめ、延岡城関連遺跡出土資料の調査を数回にわたり実施しました。そのほか、大貫貝塚を中心に、過去に行われた縄文時代の調査資料を収集するため、七月から、宮崎県埋蔵文化財センターが所蔵する延岡市内出土の縄文時代草創期から早期にかけての遺物等の調査も進めています。

民俗部会



▲ 伊形花笠踊りの調査

前年度に引き続き、市内祭礼行事等の聞き取り調査や現地調査を行っています。今年度は、四月には大師祭、八月には伊形地区で開催された、伊形花笠踊り及び笠流しの現地調査を実施しました。

また六月には、人生儀礼について、市民からの聞き取り調査も行いました。

この他、『神社明細帳』や民俗地図等の所在確認及び調査も行っています。

近現代部会



▲ 令和五年度第一回目近現代部会打合せ

六月に今年度第一回目の近現代部会を開催し、令和六年度の史料編纂の刊行に向けて、掲載資料等に関して活発な議論が行われました。

現在、近現代部会では、明治十（一八七七）年に勃発した西南戦争に関する史料調査を進めています。また、延岡市内に残る明治時代の諸記録等の史料調査も行っています。さらに、昭和期の学校教育について、市民からの聞き取り調査も実施しました。

近世部会

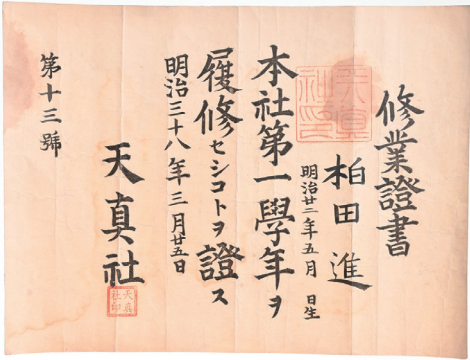


▲ 高千穂町コミュニティセンターでの史料調査

近世の延岡領主は、天正十六（一五八八）年の高橋元種入封以降、有馬・三浦・牧野・内藤氏と変遷しました。現在、近世部会では、高橋氏・有馬氏・三浦氏に関する史料所在状況の確認・撮影を優先的に行っています。六月には長崎県大村市で、八月には大阪府大阪市、岡山県真庭市で、また、九月には高千穂町にて史料調査を実施しました。

資料紹介

市史編さん事業では、古文書や古写真をはじめ、延岡に関する様々な資料を収集しています。これまでに「広報のべおか」や「市史だより」を通して資料提供をお願いしてきました。今回は、市民の皆さまからご提供いただいた資料のうち、延岡の教育に関連する資料を一部紹介します。



明治32(1899)年に私立学校亮天社が廃校となり、元在校生の一部を受け入れるため、明治36(1903)年に私立学校天真社が設立されました。天真社の経営には、旧延岡藩主内藤政学が多額の支援を行っています。明治39(1906)年、在校生の卒業を受けて廃校となりました。

◀天真社修業証書 明治38(1905)年 磯貝透氏所蔵

明治9(1876)年、女子のための教育機関として、亮天社附属女児教舎が開校しました。明治11(1878)年、本小路(現社教センター位置)に移転して独立した学校となり、明治23(1890)年には内藤家の経営に移りました。明治34(1901)年、延岡女学校へと改組されました。



▶女児教舎卒業記念写真 明治34(1901)年 個人蔵



明治34(1901)年、小学部と高等部からなる延岡女学校が成立しました。このうち、小学部は翌年に廃止されましたが、高等部は継続され、明治36(1903)年には亮天社跡地(現岡富中学校位置)に移転、明治39(1906)年に高等女学校となりました。昭和4(1929)年、内藤家から県へと移管されました。最前列右から5番目の男性が内藤政学です。

◀延岡高等女学校卒業記念写真 時期不明 山本伸一氏所蔵

延岡に
ゆかりのある

資料や情報を探しています。

あなたの押入れや蔵、公民館や倉庫などに、このような物はありませんか？



古文書



古写真・アルバム・絵葉書



日記



ビデオやカセットテープ

お話を聞かせていただくだけでもかまいません
情報や資料をお持ちの方は、お気軽にご相談ください！

【相談先】文化財・市史編さん課 市史編さん係

☎ 0982-22-7047

赤水湾に浮かぶ質の高い近代和風住宅

国指定重要文化財 日高家住宅



■日高亀市(1845~1917)

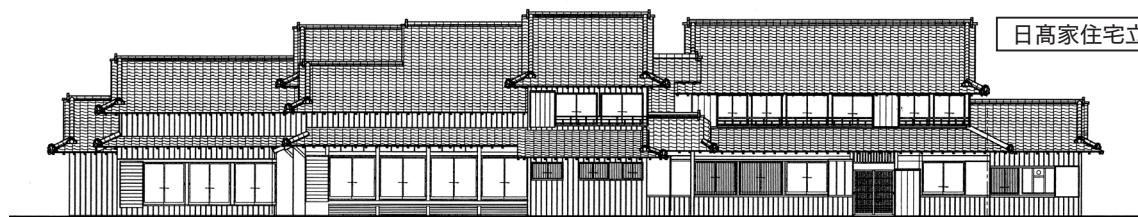
明治24年に完成させたぶり大敷網により、日本の水産業界に大きな貢献を果たした。生涯を網の研究改良に捧げ、明治43年には大謀網を發明、全国各地で漁場を経営した。

赤水町の日高家住宅は、意匠的に優れた建築物であるとの評価を受け、令和5年9月25日に国の重要文化財に指定されました。

日高家住宅は、延岡市の南部、日向灘に突出した遠見半島の北側に位置します。明治24年に「日高式大敷網」を發明して財を成し、「ぶり大尽」と呼ばれた日高亀市の邸宅として建設されました。

敷地は、明治20年頃に水揚げや網干しのために海岸を造成した埋立地で、石垣の護岸が築かれています。主屋は明治中期に建築され、大正初期にかけて増築、整備されました。良材を用いて格式高い座敷飾りを備える大広間や、洋上という立地を生かした眺望の良い座敷が設けられています。銘木の黒柿が床柱や付書院等に多用されており、数寄屋風の意匠を取り入れつつも、節度を保った造作で、質の高い近代和風住宅として評価されます。また、ぶりの燻製を製造していた燻製室は、水産業を生業としてきた日高家の歴史を象徴する建物であり、からみレンガと赤レンガを組み合わせで築造されている点でも大変貴重な建築物です。

「ぶり御殿」とも称される日高家住宅は、水面穏やかな赤水湾の洋上において往時の水産業界の活気を今に伝えてくれる貴重な文化財です。



日高家住宅立面図

編集後記

文化財・市史編さん課に配属となり半年が過ぎました。これまでに、市民の皆さまからお預かりした延岡に関連する様々な資料の調査・研究・整理を行ってまいりました。当初はお寄せいただいた資料の多さに圧倒され、無我夢中で目録を作成する日々でしたが、次第に、これら資料自体が持つ「歴史」に思いをはせるようになりました。

長い歴史の中で、すべての資料が後世に残るとは限りません。戦災や、水害などの自然災害、また、引越しや身辺整理などで、気が付けば失われてしまった資料も多々あると思います。

そうした危機を乗り越え、いま、私たちの目の前にある資料は、どのようにして伝わってきたものなのでしょうか。それは、過去の人々の、資料を後世に伝えよう、残していこうという強い意志であったり、または、処分するにも中々その決断ができないうなど、様々な理由があったと思います。

このような中であって、現在まで各家庭で保管されてきた資料は、私たちの先祖が守り伝えてきたものであり、延岡の歴史や文化を解明するうえでとても貴重なものです。また、ご先祖が確かに延岡に生きていたことを示す証でもあります。そして、これまでと同様に、五十年後、百年後の未来へと資料を確実に伝えていくことが、私たちの役割でもあります。いま与えられたチャンスを精一杯活かして、市史編さんに取り組んでいきたいと思っています。

(市史編さん係員一)

